開会挨拶

萩原 泰治（神戸大学附属図書館館長）

被災地図書館との情報交換会にご参加いただき、ありがとうございます。

昨年は、大阪、北海道の地震、それから集中豪雨、台風と全国的に様々な自然災害が続きました。また､情報交換会にさきだって上野政志さんの講演会がありましたが、忘れないことが大事だというお話でした。災害の記憶を共有し後世に伝えることは、個人にとって大事であるとともに、防災の観点と学術的な観点からも重要なことだと思います。情報交換会の中で、今後の活動の進め方についての意見・アイデアが出てくればいいなと思います。皆さん、よろしくお願いします。

奥村 弘（神戸大学大学院人文学研究科長）

この情報交換会も８回目を迎えました。東北地方の被災地における図書館・大学が抱えているそれぞれの課題も大きく、震災を伝えていくという各館・大学の取り組みが、少しずつ新たな意味を持ち始めているのではないかと考えます。

私も最近、東北地方の被災地に伺った際に、三陸海岸の盛り土ができ上がってきているのを見ました。以前は津波の碑は非常に高い場所にあると思っていましたが、今は盛り土ができた土地と同じ高さにあるということに、驚愕しました。このような現状を見ると、東日本大震災で津波が発生したときの被災地の姿をリアルに追体験することが難しい状況が既に生まれ始めており、今の子供たちにとっては、盛り土後の土地の高さが当たり前になっていくのではないかと思っています。

阪神・淡路大震災に関しては、災害時のことを思い出せる人々が少なくなってきていると感じます。最近は、阪神・淡路大震災のことに関して一般的に語るときに、発生日時や犠牲者数、規模の大きさといった一般的な情報を付して発信しないと、若い方に伝わりにくくなってきました。災害の実相を残していくために最も基本となる、文書や写真・映像、手記や聞き取りなどの多様な資料を再度活用しなければならない時期が来ていると考えます。

このような問題をふまえると、東日本大震災の経験は、先に述べた景観の大きな変化も含めて、新たな段階に入ろうとしているのではないでしょうか。災害の経験を忘れないようなシステムや仕組みをつくらない限り、やはり忘れていってしまう。このような状況の中、災害の記憶の継承という面で図書館や大学がどのような役割を果たしていけるかについて、情報交換会で共通認識をより一層深めることができれば幸いです。よろしくお願いいたします。